

研究主題 「『主体的・対話的で深い学び』の視点に立った、社会的事象を比較・関連付けて考える力の育成－『思考ツール』を用いた話し合い活動の充実を通して－」

東京都教職員研修センター研修部授業力向上課
あきる野市立東秋留小学校 主任教諭 山本 光裕

第1 研究のねらい

小学校学習指導要領（平成29年3月告示）では、「社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考えたり、（中略）考えたことや選択・判断したことを適切に表現する力を養う。」ことが示された。しかし、「児童・生徒の学力向上を図るための調査」（東京都教育委員会）の過去8年間の結果では社会科の平均正答率に対し、比較・関連付けて読み取る力の平均正答率が低く、このことから、児童の比較・関連付けて考える力の育成が必要であると考えた。

「言語活動の充実に関する指導事例集」（平成23年10月 文部科学省）に、「言語を通じた学習活動を充実することにより『思考力・判断力・表現力等』の育成が効果的に図られること」が示されていることから、話し合い活動に着目することとした。児童が話し合い活動を通して互いの意見について検討する中で、社会的事象の特色や意味などを多角的に考えることができ、また、個人で考えることが難しい児童にとっては、交流を通して友達の考えを聞くことが考える一助になると捉えたためである。話し合い活動をより充実させるため、比較や分類を視覚的に行える「思考ツール」を取り入れる。

調べて分かったことを見ながら整理、分類することで、比較・関連付けて考えることや、協働的・対話的な学習がしやすくなると考える。

「思考ツール」を用いた話し合い活動を通し、児童が協働して調べて分かったことを比較・関連付けて、主体的に課題を解決させることをねらいとして本研究主題を設定した。

第2 研究仮説

社会科の学習において「思考ツール」を用いて話し合い活動の充実を図れば、児童に比較・関連付けて考える力が付き、社会的事象について深く理解することができるであろう。
--

第3 研究の内容と方法

1 基礎研究

小学校学習指導要領解説社会編（平成29年7月）、平成30年度の「児童・生徒の学力向上を図るための調査」（東京都教育委員会）の結果、「新しい学習指導要領の考え方－中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ－」（平成29年9月 文部科学省）から、教員と子供や、子供同士の対話で思考を深めていくこと及び、社会的事象について知識を相互に関連付け、多角的に考察させ、深い理解に到達させることが重要であることが明らかとなった。学習においては調べて分かったことを分類・整理し、原因や目的について考えさせることで、社会的事象の特色や相互の関連、意味を捉えさせるような指導が求められていることが明らかとなった。そのために有効な「思考ツール」について調査・分類を行った。

2 調査研究

令和元年7月、都内公立小学校3校の第5、6学年児童及び自身の所属地域の教員を対象に、社会科における比較・関連付けて考える活動や、話し合い活動について意識調査を行った。また、児童には平成28年度の「児童・生徒の学力向上を図るための調査」（東京都教育委員会）から、

比較・関連付けて読み取る問題を抜粋して実施した。

児童に対する意識調査の結果、「当てはまる」と回答した割合で見ると、社会科の学習において気を付けていることとして、比較・関連付けて考えることに関する項目についての割合は38.8%であった。話し合い活動に関する項目については、話を聞くことについては68.7%、自分の考えを友達に伝えることについては50.7%、友達の意見を自分の考えに生かすことについては44.0%であった。一方で、話し合い活動の項目と比較・関連付けて考えることの項目をクロス集計すると、話し合い活動の項目に肯定的な回答をした児童は比較・関連付けて考える項目にも肯定的な回答をしている割合が高いということが分かった。

このことから、比較・関連付けて考えることを意識して取り組んでいる児童は多いとは言えないこと、そして比較・関連付けて考えることを児童に意識付けるためには話し合い活動が有効な手だてとなることが分かった。

教員の結果は、「当てはまる」と回答した割合で見ると、社会科の指導において気を付けていることとして、比較・関連付けて考えさせることに関する項目については36.3%、話し合い活動に関する項目については16.2%という結果であった。理由として「指導することに難しさを感じる。」、「単元のどの部分でどのように設定すべきかに難しさを感じる。」、「時間の確保に難しさを感じる。」といったものが挙げられていた。このことから、比較・関連付けて考えさせることや話し合い活動は十分に指導されているとは言えず、そのための指導方法や手だてを示し、単元の指導計画に位置付けることが必要であると考えた。

3 開発研究

(1) 話し合い活動を活発化させるための手だてとしての「思考ツール」の作成

児童相互の話し合い活動において比較・関連付ける力を育成するには、話し合いながら比較・関連付けることができる場面を意図的に設定する必要がある。そこで(図1)に示す「思考ツール」を開発した。付箋の分類という作業やグループで1枚の思考ツールを完成させるという活動を通して児童を交流させる。また付箋に書いたことを分類する中で付箋に書いたことの共通点や関係性を見だし、関連付けさせる。さらに、時数を重ねるごとに関連させる項目も複数へと増やしていくことで、より多角的な視点から比較・関連付けて考えさせるようにする。

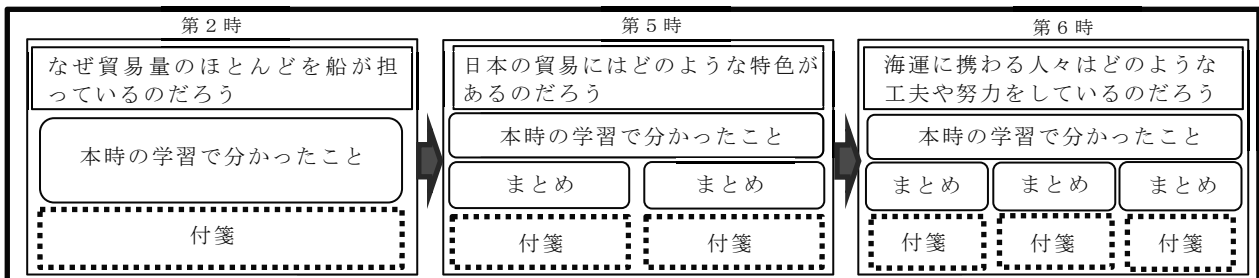


図1 各時間で使用する「思考ツール」(抜粋)

「思考ツール」の活用にあたっては、「資料から必要な情報を取り出す」、「話し合い活動を通して、取り出した情報を整理して関連付ける」、「整理したことを基に話し合っグループでまとめを行う」というように段階的に区切って話し合い活動や作業を進めることができるようにする(図2)。そうすることで、今何を話し合えばよいかを明確にすることができ、児童は事実の確認から社会的事象の理解、社会的事象の概念の理解へと段階的に理解が深まると考える。

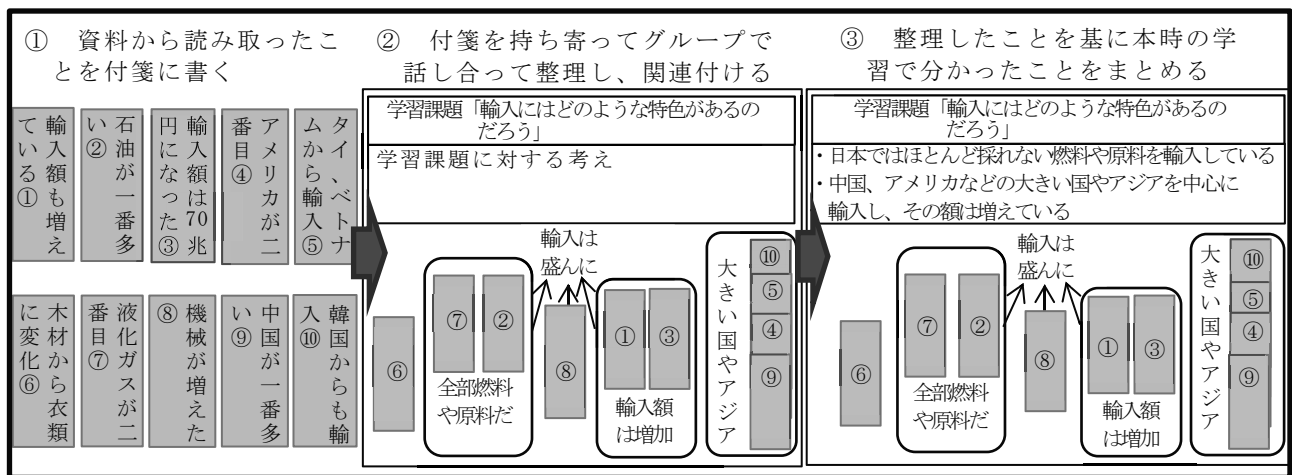


図2 付箋を使用した「思考ツール」活用イメージ

(2) 「思考ツール」を用いた話し合い活動を位置付けた単元の指導計画、指導過程の作成

教員への意識調査の結果を受け、「思考ツール」を用いた話し合い活動を単元指導計画及び1単位時間の中の「課題追究場面」と「課題解決場面」に位置付け、学習指導案に示した。そうすることで、教員が比較・関連付けて考えさせることを意識して指導できるようにするとともに、児童が比較・関連付けて考えながら学習課題を解決できるようにした。

4 検証授業

令和元年10月28日から11月13日までに都内公立小学校第5学年において、社会科「貿易と運輸」の単元(全8時間)で検証授業を行った。

毎時間、「思考ツール」を用いた話し合い活動を行った後、まとめとして本時で分かったことを児童一人一人に考えさせて学習感想シートに書かせた。また、話し合い活動についても、3件法によるアンケート形式での回答と自由記述にて児童に自己評価をさせた。さらに、授業後に7月に行った児童への意識調査を再度行い、それらの結果を基に検証授業についての分析を行った。

(1) 話し合い活動の充実について

話し合い活動(自分の考えを伝えることと友達の考えを聞くこと)に意欲的に取り組む児童が増えてきていることが分かった(図3)。また、図3と図4のグラフの推移が類似していることから、付箋の関係について考察するための話し合いが適切に行われたと考えられる。自由記述欄についても、まとめである第7時には『思考ツール』を使って話し合いをすると、一人で考えたときには気付かなかったことに気付けた。、『思考ツール』で前に学習したことも振り返りながらみんなで考えることができた。等、肯定的な意見が多く見られた。

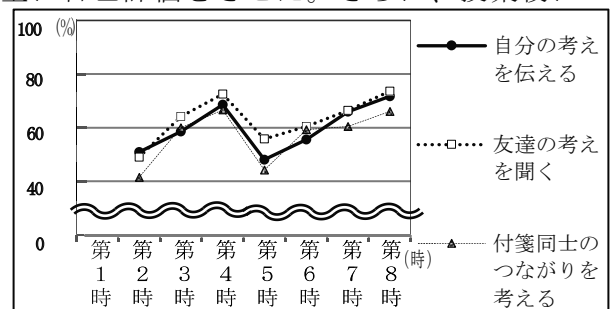


図3 話し合い活動の振り返りについて「よくできた」と回答した児童の割合(%)

(2) 比較・関連付けて考える力の育成について

資料から分かったことを比較したり、関連付けたりしてまとめることができる児童は、時数を重ねるごとに増加してきている(図4)。特に「課題解決」の時間である第7時は、89.2%の児童がこれまでに分かったことを総合してまとめることができ、捉えさせたい概念の理解まで到達させることができた。

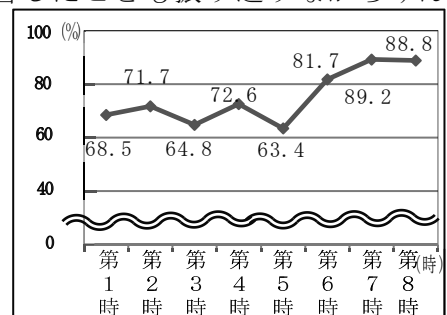


図4 比較・関連付けて考えることができた児童の割合(%)

各時間に書かせた児童個人のまとめの記述からは、資料から読み取った事実だけでなく、それらを比較したり関連付けたりしたことで分かったことも学習感想シートに記入されていた（表 1）。

比較・関連付けて考えたことで分かったことを使って、自分の考えをまとめられる児童が増加してきたのは、資料から読み取った事実について、友達との話し合いを通して整理したり、読み取った事実の共通点や関係性を考えたりする中で社会的事象についての理解が深まり、理解したことが知識として定着したからではないかと考える。

(3) 児童の変容について

検証授業後に意識調査と「児童・生徒の学力向上を図るための調査」（東京都教育委員会）の過去問題を実施し、児童の変容を見た。結果は以下（図 5）、（図 6）のとおりである。

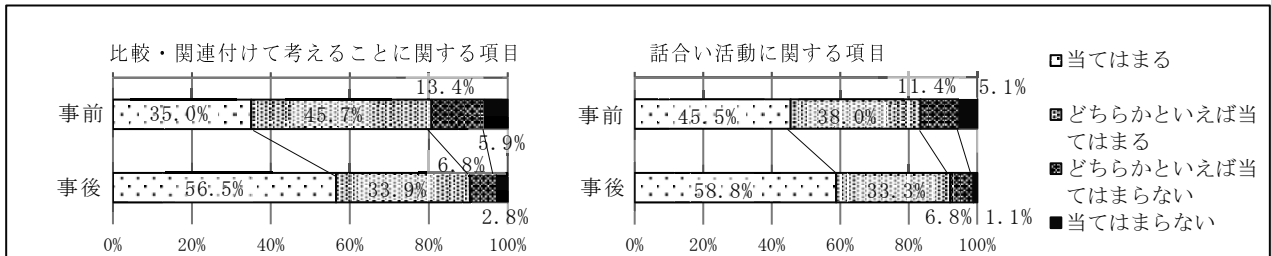


図 5 検証授業前と検証授業後に実施した意識調査から見られた児童の変容

検証授業前と比べ、「当てはまる」と回答する児童の割合は比較・関連付けて考える項目については 21.5 ポイント、話し合い活動については 13.3 ポイント上昇した。また、「児童・生徒の学力向上を図るための調査」の比較・関連付けて読み取る力に関する問題の正答率についても 12 ポイント上昇した（図 6）。

	事前	事後
必要な情報を正確に取り出す力	84%	90%
比較・関連付けて読み取る力	64%	76%

図 6 「児童・生徒の学力向上を図るための調査」抜粋問題の正答率の変容

この結果から児童は、比較・関連付けて考えることや話し合い活動を意識して学習に取り組み、社会的事象について深く理解できるようになってきたと考える。

第 4 研究の成果

- ・ 「思考ツール」を用いた話し合い活動は、「思考ツール」上で付箋を操作しながら自分の考えを友達に説明したり、付箋を操作する様子を見ながら説明を聞いたりすることができ、友達への説明や友達の考えを理解することがしやすくなり、話し合い活動の活発化につながった。
- ・ 比較・関連付けて考えさせたことで、児童が資料から分かった事実だけでなく共通点やつながりを意識して考えることができ、社会的事象の概念の理解に到達させることができた。

第 5 今後の課題

- ・ 「思考ツール」を用いた話し合い活動が他単元においても有効であるかを検証し、社会科の指導に対する汎用性の向上に努める。
- ・ 社会科の学習において、本研究で使用したもの以外の「思考ツール」についても指導を行い、児童自らが考える場面に応じ、必要な「思考ツール」を選択できるようにしていく。

表 1 児童の各時間のまとめにおける記入内容（抜粋）
 （太字下線部は比較・関連付けて考えていると見られる部分、山本加筆）

第 3 時	自動車や機械類といった 工業製品 を主に、中国、アメリカなどの 大きい国やアジアを中心に 輸出している。輸出額も増えている。
第 4 時	前と同じで、アジア、中国、アメリカなどの大きい国や地域から 輸入している。日本であまり採れない石油、液化ガス、石炭などの 燃料を中心に 輸入していて、それはサウジアラビアなどから輸入している。輸入額は増えている。
第 5 時	貿易は盛んになっている。日本からは部品を輸出して作ってもらい輸入し、逆に燃料や原料になるものを輸入して自動車や機械を作る 加工貿易をしているが、 貿易赤字 になっている。
第 7 時	貿易や運輸は 日本にはなくてはならない大切なもの である。貿易ができなくなったら 日本で採れない燃料 などが輸入できなくなり、自動車や機械などの 工業製品 が作れなくなるから。